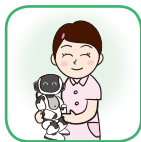


看護職の働き方改革



■病床数：673床 ■入院科：入院療養病棟Ⅱ、認知症疾患治療病棟
 職員数：看護師 常勤123人、非常勤11人 准看護師 常勤25人、
 非常勤5人 ■看護職員平均年齢：51歳 ■看護職員離職率：5.8%
 ■今回の主なテーマ：看護業務の効率化とケアの質向上

入院患者の平均年齢が約90歳、9割が認知症を有し、「終の住処」の役割も担う長期療養型病院である青梅慶友病院。同院は「豊かな最晩年をつくる」という理念を掲げ、その実現に向けて看護職をはじめ多職種が協働しケアを提供している。

マンパワー不足を機器で対応

長年マンパワーの確保が課題となっている同院。「人手が足りない分、機器など物でまかなうことを考え、早くから物を活用した業務改善を行ってきた」と語る、老人看護専門看護師の桑田美代子看護介護開発室長。移乗を補助するトランスファー機器の導入や、2014年からは情報共有・連絡のためインカムを活用。「スタッフからの報告や連絡を皆で聞くことができ、すぐに対応できます」と桑田室長。現在では全病棟で導入が完了し、情報共有の時間短縮につながっている。

こうした流れの中、同院が2018年から行っているのがロボットの活用だ。「超高齢の方は寝かせきりにせず、起きて動いてもらうことが必要。話し相手がいること、楽しみがあることがとても大切」（桑田室長）。しかし、対応する人手は限られ、

すぐに人を増やすことも難しい。そんなとき、看護の場でのコミュニケーションにロボットを活用する研究を知り、研究協力の形で導入が始まった。

職員ヒアリングによるニーズ把握や、ロボットの有効活用について検討し、導入先は認知症患者の多い病棟に決定。同院では「いいことはやってみよう」という進取の気風があり、導入に異論は出なかったが、職員もロボットを触った経験がなく、導入当初は犬型ロボットのアイボを職員食堂に放して慣れてもらうなどした。

ロボットがコミュニケーション担う

ロボットの主な活用場面はホールとした。ホールでは食事やテレビ視聴などのほか、運動療法や音楽療法も提供される。その際、スタッフは患者に安心感を与えるためコミュニケーションを取りつつ、患者の行動を注意深く見守っている。この場面で人型のペッパーや、小型のロボホン、アイボといったロボットがコミュニケーションの役割を担う。例えば、ロボホンが歌って踊ると笑いが起き、ペットの飼育経験のある患者はアイボの世話をし、桑田室長は、効果として「超高齢の方が笑顔でいる、穏やかでいられるという質的な部分」に期待する。事実、ロボットを介して、患者同士や職員との話題のきっかけになる場面や、認知症に伴う行動・心理症状(BPSD)の予兆を感じた際にロボットの介入で回避できたと感じた場面もあった。職員にとっても、ロボットが患者の対応をすることで、必要なケアに注力できる環境につながっている。ことしからは新たなロボットも仲間入りし、より多くの病棟で利用されるようになった。



新しく取り入れたロボット（バルロ）と桑田室長

「人に勝るものはない」ということが大前提であり、ロボットの導入により、自分たちの役割を見つめ直すきっかけにもなった。いかに物を活用して職員の業務を減らすか、逆に、人をどこに投入し、何をすべきかを見極めることだと語る桑田室長。ロボットをはじめとする新たな技術を活用しながら、さらに患者のためになるケアの提供に向け同院の挑戦は続く。

Q&A ナースのはたらく時間・相談窓口

相談

新しい職場で働き始めたところ、勤務先は固定残業代制で、残業代は毎月3万円のみで、それ以上支給されません。実際の残業時間よりも少ない額しか支払われていないことになりました。

回答

固定残業代制を採用する場合には、募集要項や求人票などに具体的に固定残業代に関する労働時間数と金額等の計算方法や、固定残業時間を超える時間外労働、休日労働および深夜労働に対する割増賃金を追加で支払う旨などを明示することが必要です。改めて上記について職場側に確認し、実際の残業時間に対する残業代の支給を求めていきましょう。

ナースのはたらく時間・相談窓口
 hataraku@nurse.or.jp FAX 050-3737-2820

ナースセンターをご活用ください



都道府県看護協会による無料職業紹介事業を行っています。詳細は左記の二次元コード（e ナースセンター）をご覧ください。